

第三十回中央教化研究会議

一、開催趣旨

(1) 中央教化研究会議は、広く法華経教化について論議し、具体的方策を樹立することを目的に開催されます。

(2) 中央教化研究会議は、各管区の教区教研運営委員を中心として、教区・管区での教化活動の現状を話し合い、お題目総弘通運動推進に係わる諸問題を検討致します。

(3) 各部会での討議を通して、教学の現代化、教育問題、社会問題等に取り組み、問題の把握、解決、教材資料の作成をめざします。

(4) 論談を通して、日蓮一門、地涌の菩薩としての意識をたかめます。

二、統一テーマ 「誓願」 ～二十一世紀 私たちの立正安国を問う～

三、全体会

(1) 基調講演「但行礼拝の行者藤井日達師の問いかけるもの」 日本山妙法寺長老 今井行順師

(2) 記念公開講演「新しい死の文化を求めて」 上智大学教授・哲学博士 アルフォンス・デーケン氏

(3) シンポジウム「ターミナル・ケアを支える宗教者の役割」

四、部 会

○第一現代教学部会 「私達は、何を目指し、誰の為に題目を唱えるのか。」

わが国の内外で、お題目を唱えて、世界平和への行動を展開している日本山妙法寺の僧侶を招き、パネルディスカッションをします。その中から、本宗教師の理想・目標を見つめ直し、現代の課題を考えて参りましょう。

○第二現代教化部会 「果して現代は無宗教社会なのか？」

日本社会が「無宗教民族」と言われて随分久しい気がする。今回は日本人の宗教意識をNHKビデオ「無宗教社会日本のゆくえ」という番組を資料に顕正会、創価学会等の分析を提起とし、「立正安国」が現代の宗教意識の中で、いかなる意味を提示できるのかを考える。

○第三現代教育部会 「あなたなら、どんな教育を求めますか？」

一貫して「次代の教師像」について追求しています。今回は、信行道場を始め宗門の教育機関について具体的に検証し、その問題について語り合い、そして、信行道場入場前と修了してからの教育のあり方や方法について探究します。

○第四現代社会問題部会 「現代社会におけるいのちに関する様々な問題を考える。」

この部会は、高度に発達した現代社会がその矛盾として次々に生み出す多様な問題に対し、日蓮宗教師はいかに考え、日常の教化活動にどのように生かして行くかを論議して来た。今開催においても、現在最もホットなテーマを三項目（「脳死・臓器移植」「環境問題」「性差別」）を取り上げ、これらの問題についての情報・知識を共有しつつ、主体的な討議を通じて現実の社会によって我々に問われている難解な問題の解決に向けての方途を模索することを目的とする。

五、各教区教化資料展示

六、開催方式 今回の中央教化研究会議は、左記の方式で運営致します。

(1)部会制により会議を行う。

(2)参加者は第一日目の部会プレゼンテーションにて一部会を選び、各部会毎に討議をする。

(3)参加者は、事前に送付された会議資料・参考資料などをもとに準備をすすめる。

(4)会議において討議されたものは、教区の教研会議の資料や今後の教化に役立てられるようにまと

める。

(5)各教区教研会議における成果の発表として、教区管区並びに教化センターで作成された教箋等の教化資料を会期中展示室を設けて展示する。尚、各寺院で発行のものは、各管区(教化センター)に委託して展示する。

七、会場 東京ヒルトンホテル 新宿区西新宿六―六―二 電話〇三―三三四四―五一―一

八、宿舎 東京ヒルトンホテル

九、参加者 宗務所長より推挙委嘱された教区教研運営委員、或いは各部会に関心があり継続して取り組める管内教師(管区二名)

※第二日目記念公開講演・シンポジウムは本宗教師を対象に公開しています。参加希望の方は直接会場にお越しください。

十、服装 折五条・数珠・布教服(開会式・閉会式のみ着用します)

十一、持参品 会議資料・筆記用具・各教区管区発行の教化資料

十二、日程 ◎第一日目 九月四日(木)

受付 九時～九時三十分

開会式 九時三十分～九時五十分

部会プレゼンテーション 九時五十分～十時十五分

基調講演 十時十五分～十二時十五分

昼食 十二時十五分～十三時

部会別討議 十三時～十七時

記念祝賀懇親会 十八時～二十時

◎第二日目 九月五日(金)

朝 食 七時三十分～九時

記念公開講演 九時～十時四十分

シンポジウム 十時五十分～十二時二十分

昼 食 十二時二十分～十三時二十分

全体会議 十三時二十分～十四時二十分

閉 会 式 十四時二十分～十四時三十分

解 散 十四時三十分

但行礼拝の行者 藤井日達師の問いかけるもの

今 井 行 順

(日本山妙法寺長老)

ただいまご紹介いただきました今井行順でございます。ご紹介の中に昭和五年にお師匠様が西天開教に立たれたときに、ご一緒したようなことをいわれましたけれども、そうではありません。私はそのとき五歳でした。確かに昭和五年八月二十五日を、お師匠様は西天開教の日として、身延山を起点として発たれましたが、その前日に、身延山の武井坊で二十数人のお弟子さんたちをつくられたのです。得度式をされた。そのときが一番年下の弟子が私でございます。もちろんお師匠様と一緒に行くわけがありません。お師匠様は単身孤影、西天開教にインドへ旅立たれたのであります。私はそのとき右も左もわからない子供ですから、親の意志で、よくも出家させたなと思いますけれども、両親とも信じていたのですね。今、お師匠様は二度と再び日本へお帰りになるかどうかわからない。ですから、今ここでお師匠様の弟子にしておかなければいけないと考えたらしいのですが、そのまま今日に至りました。非常にできない悪い弟子であります。

今日は「但行礼拝の行者・藤井日達師の問いかけるもの」という題をいただきました。まず私、最初にお詫びしてお許しをいただきたいことがございます。今も私ちよっと「お師匠様」という言葉を使いましたが、私、山主藤井上

人を「お師匠様」とか「恩師上人」とかいう言葉で呼称いたしますが、弟子がそういう言い方で皆さんにお話するのもちよっとおかしいと思うのですが、どうかお許しいただきたいと思えます。

それから、お師匠様をご遷化されたのは昭和六十年ですが、その前年、もう二カ月ぐらい前に立正大学で講演されました。その前に法華会でもホテルオークラでも講演をされました。そのときに本養寺の難波上人におそばに坐っていただいて対告衆になっていたのです。これはどういう意味かといいますと、お師匠様は宗門の皆様にも、管長様はじめ指導者の偉いお方に法を説くという非礼さを避けられたのです。それで若い難波上人にお願いして、そばに対告衆として坐っていただきました。それでお話をされたのです。このことは日本山の人でも気づいておりません。お師匠様という方は、それほど非常に細かいところに心を配られる方でありました。けれども、今日は私は法を説くのではなくて、日本山の信仰理念をご紹介するだけです。その意味でただ皆様に壇上から、僭越ですがお話をさせていただきます。

一

日本山の思想理念をご紹介するに当たって、いろいろの角度から申し上げることがございます。どれをとるべきかと思いましたが、一番問題なのは、マハトマ・ガンジーにお題目を伝えたということです。これは案外知られていないのです。非暴力主義を旗印にして、インドの独立を指導したマハトマ・ガンジーの名前を知らない人はほとんどいないくらいですが、マハトマ・ガンジーが「南無妙法蓮華経」と毎日、朝晩唱えていたという事実を知らないのです。これはガンジーという人の不思議な一つでして、ガンジーが毎日唱題行を続けられていたことはまぎれもない事実なのです。このことをなぜ日本でも取り上げないのかということが、私はどうも不思議なのです。これが日本山妙法寺という一つの小さな教団の歴史だからというならば、実にばかげた低俗な宗派意識です。ガンジーは日本山の信者に

なつたわけでも何でもない。ガンジーという人は日蓮宗の信者になつたわけでもない。それなのに一九三三年十月四日に、藤井上人、お師匠様がガンジーにお目にかかったとき以来、ガンジーはお師匠様の唱えていたお題目をとりあげて、ご自分の祈りの中に入れられたのです。しかもアシユラム、塾のことですが、アシユラムの祈りの中の、十分か十五分ぐらいの祈りが続くのですけれども、その中の冒頭に、まず「南無妙法蓮華経」の三唱から始まるのです。これは今でも決まっております。ガンジーのアシユラムに行きますとお祈りの本を売っております。その本の中に、英語でもインド語でもそうですが、最初に「南無妙法蓮華経」が三回書いてあります。これを三唱して、それからインドの祈りに入るので。

このことは私は非常に重要な問題だと思ふのです。それなのに宗門で一つも取り上げようと思ひません。これは日本山の話だと思つていらつしやる。だけれども、これは教育機関でも当然取り上げるべきだと思います。あしかけ十六年間、朝晩唱えておられた。それで一九四八年一月三十日に凶弾に倒れたのですけれども、それは夕方です。これからお祈りに出るというときにピストルで打たれたのです。朝の祈りではやっぱり「南無妙法蓮華経」を言っているのです。しかもガンジーが独立を指導した、拠点にしたワルダというアシユラムは、ネール、ボース、パテルにしても、インドの歴史上に永久に残るすべての人たち、こういう独立の指導者が全部集まつたところですよ。

そしてガンジーのところを集まれば、必ずガンジーと一緒に祈りをしたのです。その祈りをすれば、まず「南無妙法蓮華経」から始まるのです。ですからインドを独立させた人たちは、すべてガンジーとともに「南無妙法蓮華経」のお題目を唱えた人たちがばかりです。これほどの重大な事実を、なぜ放っておくのでしょうか。これは大変な問題です。ガンジーに関して書かれている書物が、英語やヒンディー語ではない、日本語だけで書かれた書物が、戦前・戦中・戦後をあわせると、百五十冊を超えていると思ひます。東京と新潟においてありますが、私がついているだけでも百二十冊ぐらいあります。日本語で一人の人物についてこれほどの本が出た人がいらっしゃいますか。ガンジーという人

はこれほど人気のある人です。にもかかわらず、その中で一冊も一行もガンジーが「南無妙法蓮華経」というお題目を唱えていたという事実に触れたものがない。なぜか、こういうことに触れてはいけないうように思っている。これは私は宗派意識からきたものではないと思います。これが現代の宗教感覚だと思っております。

現代の宗教感覚は、ガンジーほどの偉大な人物を追いかけていっても、その人の精神的な面を追いかけようとしないうです。政治面からだけ見ている。もしもガンジーの精神を追求する気があるならば、当然ガンジーが「南無妙法蓮華経」を採用したという事実を見逃すはずがない。これは私は今日の宗教問題の中で重大問題だと思っております。この宗教意識がオウムをつくったのではないですか。これが今日の現在の宗教感覚の誤りだということですから。これはガンジーの「南無妙法蓮華経」、ガンジーのお題目を紹介しなかつたということの大きな証拠です。

では本当に知らないかという点、そうでもないのです。中村元先生が、一九五六年（昭和三十一年）にインドに行かれています。私どものお師匠様もそうだったのですけれども、国賓として招かれました。「ブッダ・ジャヤンティー」といって、仏滅二千五百年という祭りをネールは国を挙げてやったのです。これは大変な行事でした。全世界から仏教の指導者を集めました。日本から宗教家として招かれたのが藤井上人です。それから田中香浦先生、中山理理先生、あとは学者です。中村元先生とか宮本正尊先生とか、そういう方がみんな一九五六年の「ブッダ・ジャヤンティー」に行かれたのです。これはニューデリーの大統領官邸のパーティーなどでは周恩来も、みんなこの部屋に入ってきたのです。それから北朝鮮の仏教徒も、坊さんではなかつたようですけれども、その人もおりました。私『英和事典』をその人にさしあげたのです。それから韓国から五人、坊さんがいらつしやつた。これはみんなこういう部屋に一同に入ってパーティーをしたのです。大変なことをインドはやってくれたのです。

このときに、ガンジーの碑がニューデリーにございます。そこに中村先生が行かれたのです。私ども到着したのがちよつと遅れたのですが、そのときに中村先生が終わって、私に「さつきお祈りの初めに、どうも南無妙法蓮華経と

言ったような気がするのですけれども、あれは言っているのでしょうか」といわれるから、「そうですね、あれは南無妙法蓮華經。このガンジーのお祈りは、最初に南無妙法蓮華經から始まることになっているのです」と言いました。私はそこに坐わっていないのです。そこにはインド人だけでしたから、それで中村先生はびっくりしたのです。そのことは何かちよつと書いていらつしやいました。

それより以前に、中山理理という真宗の坊さんが戦後にインドに行かれて、私らまだ行っていないときですけれども、ガンジーの一周忌にワルダというところで平和者会議の大会があつた。それに呼ばれていった。参議院で高良とみという人、それからもう一人キリスト教の人と一緒に行かれたのですけれども、そのときにワルダのアシユラムで、ガンジーの祈りがガンジーのお弟子さんたちによってなされた。そのときに初めて、このときは太鼓を打つたそうです。あの大きな団扇太鼓があそこに置いてあつたのです。太鼓を打つて、「南無妙法蓮華經」というところから始まつた。それで中山先生はびっくりして、「あなたたちは私が日本人だから、そういうことをやってくれたのだからうけれども、私の宗旨は違うのだ」と説明したそうです。「そうじゃないのだ。宗旨に関係ない。これは藤井グルジイという方とマハトマ・ガンジーとの間のつながりができていて、ガンジーの遺言で、このアシユラムが続く限り、ここのお祈りは南無妙法蓮華經から始めるのですよ」と教えられた。びっくりして帰つてこれらて、さっそくお師匠様のところに来られました。これが中山理理さんと日本山の接触の最初です。

こういう事実があるのに、なぜこのことが広まらないのでしょうか。広まると日本山の連中が少し威張りだすのではないかというような気持ちがあるかと思ひます。事実、日本山のお弟子などはその程度です。だから日本山にも責任があると思ひます。けれどもこれが事実のことですから、やはり宗門の方も追求しなければいけないと思ひます。なぜ、ガンジーは「南無妙法蓮華經」を唱えたか。これは私は大変な問題だと思ひるので、そのことをちよつとお話しします。

ない。日蓮大聖人の誓願を日蓮大聖人がやられるのです。それに対してお師匠様が立ち上がっただけです。ですから我が身はその任をいただく資格があるかどうか、恩師上人は非常に不安におののきながら旅立ちなされたのです。決して勇んで行かれたのではない。自信をもって行かれたものではありません。もちろん再び日本の土が踏めなくなるかもしれない。そう覚悟された決死の鹿島立ちであります。

毎年八月二十五日に、日本山の二門は西天開教記念行事として身延山に参詣いたします。これは参詣することになっているのです。この日は私たち日本山一門にとって、本当は涙の日なのです。それが今の日本山の二門にはわかりません。おめでたい日だと思っている。この涙が枯れて、日本山の人たちにこの意識がなくなったときには、日本山妙法寺崩壊のときです。日本山妙法寺といえども、こんなもの永久に続く教団とは私は思いません。宗教法人日本山妙法寺の中に、藤井日達という名前は入っておりません。日本山妙法寺を宗教法人にしたのは、「宗教法人にしてくれ」と文部省がやたらにいつてくるからです。それで届けばすぐ宗教法人になるからということで宗教法人にしたのです。宗教法人にしておかないと日本山は不便なのです。花岡山の仏舎利塔を建てるのでも、土地を買っても、何でも税金がかかるでしょう。お師匠様個人の藤井行勝の名ではやれないのです。それでしようがないから宗教法人になったのですけれども、その宗教法人の初代代表役員は丸山行遠です。藤井行勝という名前は入っておりません。これも日本山の人たちは知らないのです。お師匠様が初代代表役員だと思っています。それでお師匠様が亡くなられたら、今の我々の最高のお弟子さんが二代目を継ぐと思っています。日本山に二代目はありません。日本山妙法寺という教団は原始教団です。このことを日本山の人たちは認識しないと誤ってしまう。原始教団では二代目は出はしません。既成教団では出ます。ローマ法王が死んでも一週間以内にまた次の法王が生まれます。けれども原始教団には二代目が出るはずはない。宗教法人は何代目もあります。私ども宗教法人はやはりつぶれるかもしれない。

ですから宗教法人日本山妙法寺と、日本山妙法寺藤井行勝とは、はっきり分けて考えていただかないと、お師匠様

の法門はわかりません。お師匠様にはそういうところがあるのです。

では昭和五年に、なぜお師匠様は西天開教に発たれたのか。私は子供のときから、これが疑問で不思議でしようがなかった。だんだん育ってきまして考えていくと、どうも昭和五年は日本では大切なときなのです。お師匠様は関東大震災の報をハルピンで聞かれた。ロシアの開教に行こうとされたのです。ロシアは無宗教でしょう。無宗教のロシアができたというので、宗教を完全に否定するような国家が生まれたというので、これはお師匠様は驚きだったのでしよう。「そこに行つてお題目を唱えなければいけない。そこで太鼓をたたかなければいけない」という決意をされて満州に渡られた。その間、満州布教をいろいろされたのですけれども、目標はロシアだったのだそうです。それでハルピンまで行かれた。ハルピンにも日本山妙法寺をつくられたのです。そこまで行つたら関東大震災が起きて、そのニュースが入ってきた。この報に接して、お師匠様は直ちに日本に引き返しました。ロシア開教も満州開教も捨てたのです。ということは『立正安国論』の鏡にてらして見たときに、この帝都を中心とする大震災は、日本の亡国を天が教えたことだ。これを信じなければいけない。立正安国の明文が正しいならば、間違いなく日本が減びる、こう確信されて、直ちに皇室のご祈念に入られた。

ここでついでですから申し上げますが、日本山の皇室に対する考え方は、権力の頂点としてとらえているではありません。あくまで文化の頂点としてとらえています。皇室にその徳がなくなつたら日本の皇室は滅びます、なくなります。ですから、それが日本が減びる前兆になりますから、その徳を絶やしてはいけません。そこで皇室のご祈念をして、国主諫暁をしなければいけないというので、それが立正安国の精神だということ、皇室のご祈念をされたのです。これが帝都開教の初めです。

ならば、それからの日本はどんどん悪くなっていくでしょう。昭和三年にはときの首相田中義一でさえ真相がつかめなかつた張作霖の爆殺事件が関東軍の謀略で起こされております。満州事変は昭和六年に起きています。昭和四年

には、アメリカに経済大不況が起きています。それが昭和四年の暮れには日本に上陸しました。五年から六年あたりは、新潟でもそうですけれども、東北の農家、特に小作人たちは、米は豊作ですけれども、米価は半額になってしまつて食うにも困つた。たくさん米をとっているのに全部青田刈りされていますから、それをみんな地主にとられてしまつて。おまけに現金も借りていますから、お金も返す力がないから娘を売つたのです。ですから東京の吉原、玉の井というところには、東北あたり、新潟あたりの農家の娘さんがどんどん入つてきた。これは昭和四、五、六年の時代です。

こんなときに帝都をご祈念してお師匠様が、なぜのこのインドに行くのですか。これは私は子供のときから不思議で、『立正安国論』の鏡にてらして、日本国の亡国を見ている人が、この大事なときに、これは一般でも、この時代のことは、思想国難、経済国難という言葉が出ていたのです。これは心ある人はみんな日本の亡国を憂いていたことです。何もお師匠様一人が『立正安国論』を言つて、日本が危ないなどと言つていたのではない。こういう人はたくさんいました。そんな時期に日本を留守にして、一人でのこのインドに西天開教だという。私はこの西天開教はどうも符におちなかつたのです。納得できない。それほど日本のことをおっしゃっている人が、この日本を留守にするとは何だと思ひました。もう満州事変が目前にきています。神兵隊事件だ、五・一五だ、二・二六だ、と次々におきています。自界叛逆の難が次々に起きています。そして他国侵逼の難に移つていく。もうはつきりしているときでしょう。このときに日本のご祈念をもつと真剣にやるべきではないか。それをなぜインドに行つたのだと、これはだれでも思うのが本当なだけども、日本山の人たちはのんきだから、そう思わないのです。

それで私はガンジーを見たのです。昭和二年（一九二七年）からガンジーのインドの独立運動は、急にまた盛り上がったのです。それまで十年の間、ガンジーは鳴りをひそめていた。一九二二年からずっと鳴りをひそめておりました。インドの市民運動は停止されていたのです。それが再び火を吹いたのが昭和二年ごろです。

では、お師匠様はいつごろからガンジーを見ていたのだろうか。丸山行遼という方が私の大先輩であります。私はこの方の教育を受けているのですけれども、この方が最初にお師匠様を訪ねたのは大正十四年です。この人はもともとちよつと国家社会主義的な思想をもっている人です。ですから下中弥三郎とか、そういう連中とつきあつて動いていた人です。あのころは国家主義でも社会主義でも同じようなものがたくさんいました。早稲田に行つて、学生時代にはこの丸山上人はロシアの服でルパシカを着て歩いてたそうです。だから青年時代はかなりかぶれていたのです。それが右翼として有名な笠置良明という人がいますが、この人の紹介でいろんなアジア問題について笠置良明に質問したところが、「そういうことはわしは答えられん。それはわしの知っている限りでは、藤井行勝という坊さんのところに行つた方がよい。この方は立派な人だから、そこへ行きなさい」といつて紹介状を書いてくれた。その紹介状をもつてお師匠様のところに行つたのが大正十四年だった。

それでお師匠様のところに行つたときに、丸山上人は、インドへ行きたいといつた。インドに行つて独立運動の真ん中へ自分も入りたいたのだと。そういう血氣にわいた人なのです。そのときにお師匠様は、「わしもインドに行く。だけれども今は時期ではない。もう少し待ちなさい」といつて、叱つたといふのです。これを私は聞いておりました。では、どれが時期なのだろうかといふことで考えてみますと、ガンジーなんです。『撰時鈔』に、「夫れ仏法を学せん法は必ず先づ時をならうべし」とある。お師匠様はこれに従つたのです。インドにおけるガンジーの非暴力による独立運動は昭和二年からぐつと上がつてきました。昭和五年は最高潮です。「塩の行進」が昭和五年におきています。その前にガンジーは十一カ条の要求をアーウィン総督に突きつけています。もし一年以内に我々に自治を与えない場合には容赦なく戦うといふガンジーはすごい脅しをかけた。それが昭和四年です。

こういうことをお師匠様はずつと見ていたのです。これはよく調べてみますと、何も藤井上人だけではありません。その当時の日本にいるアジア主義者は全部これに注目していたのです。「アジア主義」といつとちよつと変に皆様思

うでしようけれども、アジア主義といつても、アジア主義者の中にはいろんな流れがあります。岡倉天心などもアジア主義者で、その範疇に入る人です。そういう人もいるのですけれども、本来アジア主義者とは、アジアの解放を願っていた人です。明治維新は列強によってアジアが征服されている中で明治維新が起きたのです。日本だけがかろうじて侵略されなかった。運もありますけれども、日本の明治維新は大変な維新なのです。あとは全部列強にやられていたのです。高杉晋作は上海で清の人たちがひれふして、膝まづいて辱めを受けている姿を見て帰ってきています。太平天国を見てきている。そういう時代に日本の明治維新は生まれたのです。だから明治維新はただ徳川を倒して、王政復古したなどという、そんな単純なものではありません。これは大変な時期を日本民族は通りこしてきた。ですからアジア主義者は、その延長で、このアジアの解放を何としてでもしなければいけない、その使命感に燃えていた。そこまでは別に侵略思想でも何でもないのです。

ところがその中の一部の流れが、軍国主義のお先棒をかつぎました。それでアジア主義といえば侵略主義とか軍国思想、軍国主義というのが連想されるようになってしまった。しかしアジア主義そのものは、絶対に軍国主義でもなければ侵略思想でもありません。このことからみれば、お師匠様もアジア主義者の一面をもっていると思います。これは私自身、断言できます。お師匠様自らおっしゃったことはありませんが、そういう範疇に入るだろうと思います。だからアジアの解放を憂っていたのは当然です。ですからインドを見つめていた。私の小学校のときの校長先生は、インドに行ってきた。それで私が子供のときにインドの話をしてくれたことがあります。子供たちを相手にしてインドを見てきた話をしているのですが、インドのカルカタで乞食にぶつかったときの話をすると、この人は声をだして泣いていました。そういう感情が昭和の初めごろの日本にあったのです。ですから何もお師匠様だけが、藤井上人だけがインドを見つめていたわけではありません。けれどもお師匠様はインドの独立、ガンジーの運動を、『撰時抄』にのっとって、「時」として選んでおられた。何の「時」か。いうまでもなく「立正安国」の「時」です。

これは昭和五十八年、お師匠様が亡くなるちょっと前ですが、正月に、多摩の道場で年頭法語としてお話をなさった中にはつきりいつておられるのです。「インドの独立よりほかに西天開教はありません。もしありといえば、それは商賣、宗教の職業であります。日本山の西天開教とは、インドの独立運動でありました」。長いお話の中でこれだけ言いつばなしですから、だれも気にとめていないのですけれども、私はドキリとしてこの話を聞きました。九十九歳にもなられているお歳ですから、話としては細かいことをおっしゃらない、そのまま言いつばなしです。でもお師匠様にはそういう考えがあつたことは確認できます。インドの独立運動とは、ガンジールの非暴力運動のことです。他のことではない。ガンジールの非暴力がなければ、恩師上人の、お師匠様の昭和五年における西天開教はあり得なかつたと私は思っております。

ガンジールが提唱した非暴力による独立運動の成功は、そのときの日本の危機をあとにしても、かかわらなくてはならない重要な「立正安国」のご祈念の対象だつたと、お師匠様は判断しているのです。ですから我々日本山一門にとつては、このガンジールの運動を無視して日本山の運動などはありません。この大切な日本の危機をあとにしても行かなければならぬほど、立正安国の祈念の対象になるべきものがガンジールの運動だつたのです。

ですから、ガンジールを我々はもつと知らなければならぬのが日本山の義務です。けれども宗門だつて、このことを考えていただきたいと思ひます。ガンジールの非暴力運動は、インドの独立を達成する力となるだけではない。未来の人類、これから二十一世紀、そしてその先、その時代の人類の生きていく道を示している運動です。いまだかつて非暴力によつて独立運動をはかつたものはありません。それだけでなく、非暴力による集団行動はガンジール以前にはないのです。お釈迦さまはもちろん、マホメットだつてキリストだつて、すべての聖者は非暴力です。自分で暴力など使つていません。けれども個人の非暴力です。しかし集団でもつて、市民運動として非暴力運動をしたのは、歴史上ガンジールが初めてです。ですからお師匠様は注目していた。これはただごとでないという見方をしていました。そして

「立正安国」の祈念の対象とするものは、ここにあるのだということを見つげられたのです。これが昭和五年の西天開教なのです。

このとき、ガンジューの非暴力運動、非暴力を好意をもってみる者と、そして興味を示す者は、世界でたくさんおりました。日本でもそうです。頭山満さんなども、ああいう右翼の親分みたいな人ですけれども、ガンジューの非暴力を非常に高く評価しています。けれども信じてはいません。大きな市民運動を起こして英国を困らせるだろう。英国はこれで手をやくに違いない。けれどもこの非暴力によってインドの独立が達成するなどと思つてはいません。ロマン・ローランにしてもトルストイにしても、みんなこれを好意をもっては見ていました。ガンジューの非暴力は非常にいいことをやっている、なかなか立派なことだというようには見ていた。けれどもこの非暴力でインド独立が達成されると信じている者はいませんでした。このときお師匠様ただ一人が信じたのです。これが偉大なところですよ。たった一人藤井上人を除いて、非暴力によるインドの独立が成功すると信じた人は世界で一人もおられません。これは大変な問題なのです。『諫暁八幡抄』の「日本の仏法、月氏へかへる」という大聖人の未来記に沿った発願には違いないのですけれど、『撰時抄』の明文にしたがってこの時期を決められているのです。

一一一

また「日本の仏法、月氏へかへる」というのは、日蓮大聖人の未来記ではありません。しかしさつきも申しましたように、大聖人の誓願でもあるのです。単なる言いつばなしでそうなるであろうという、将来を予言したただけではありません。これはお祖師様自ら誓願されていることなのです。だから西天開教はお祖師様がやられるのだという、その認識にたつて願文を読まれているのです。「高祖大士の本懐を扶けて」とお願いしているのです。「我等が修行をまもらせたまえ」、西天開教は単なる修行です。何も得意になっていることはありません。日蓮門下なら当然考えるべき

修行です。

ですから、いきなり身延山にお別れにいったのではありません。まず三月に行っています。それから次に七月にもお別れに行っています。それから八月のお別れになっている。三止三請の儀式にのつとつて、西天開教の鹿島立ちをされています。お師匠様は非常に慎重です。これは今、日本山の人たちを見ていると非常に恥ずかしい。日本山の古参だ、長老だといっている連中の話を聞いていると、全くこの点を考えていない。熱海を出発点にしたなどと思っている人がいる。こんなことだったら、西天開教とお祖師様を冒涇することになってしまう。お師匠様は大変この点に氣を使って、お祖師様におすがりして、それでインドに発たれているのです。

ただここで注目すべきことは、この恩師藤井日達上人の壮拳を日蓮宗の人にも理解されていた事実があるということです。当時の日蓮宗の方の中には、このお師匠様の、この私が言ったような程度のことはちゃんと理解されて応援して下さった人がいます。さもないければ、藤井上人のお母さんの墓がどうして奥の院の聖域にできるでしょうか。あの場所に作らせていただけるといふことは、名もない乞食坊主ですよ。日本山なんか吹けば翔ぶような教団です。そんなところの二十人か三十人、弟子をもっているような坊さんが、自分のお母さんのお墓を奥の院に建てるなどということはできるわけがないのです。それをさせていたということだけでも、身延山でこれを理解している人がいたということなのです。

特にその前日、八月二十四日に得度式をしています。私もそのとき得度を受けた者です。それがお師匠様が武井坊——武井坊というのはご存じのように焼けたのです。前の武井坊は違うはずですが——の本堂でお師匠様は二畳台に坐わられて、導師として得度式をされた。そのときに小松海浄猊下も、それからお隣の清水坊の内野日蓮猊下も参列して下さっているのです。武井坊の本堂を使って日本山の得度式をする。日蓮宗の得度式ではない。日本山妙法寺一門の得度式です。それに小松猊下が参列して下さる。これはお師匠様の西天開教に対する理解がなければ、こういうこと

をやるはずがないでしょう。

だから当時の日蓮宗の指導僧の中には、何人もこういう方がいられたのです。京都の河合日辰猥下、お師匠様がインドに行かれた後、三人のお弟子さんを送ってこられました。永井行慈上人、三木慈教上人、天崎行昇上人さんはまだ生きています。青年時代に上海事件のときに遭難にあった人です。日本山の寒行に出てきまして、寒行の中で太鼓をたたいて一緒に歩いてた。あれは松本清張なんかの書いたもので、東京裁判からとっているからいいかげんな書き方をしています。けれどもあれはただの寒行だった。全くの偶然です。道も決めないで歩いてた。そしたらあちこちで集会がある。たまたま抗日の集会をやっているところのそばまできた。そこで日が暮れたので提灯をつけた。その提灯に「日本山妙法寺」と書いてあるでしょう。それを見て、抗日演説をして、それを聞いている連中も興奮していますから、パーンと石を投げ込んだのです。それをきっかけて周りから襲撃を受けた。それを軍部がやらしたとか、何かいっていますけれども、全部うそです。この事件は全くの偶然です。ただこの事件を上海事変のきっかけに軍部が利用したのです。この事件を確かに利用はした。けれども事件が起きたのは全くの偶然です。寒行で回っていて、提灯をぐつとあげた。そしたら「日本山妙法寺」と真ん中にでているので石をぶつけられた。それがきっかけになってあの事件が起きたのです。

その河合猥下のお弟子さんが三人もお師匠様の後を追ってインドに行っているのです。だから藤井上人の壮拳に対して理解を示しておられた。後に日本山と宗門との間のいろいろ争いが出るのです。お師匠様とすけれども。これは満州開教の中で、満州における日本山を排斥しようとして、宗門の教団にそういう政治的な動きが事実あったのです。これに対抗した。それで日蓮宗と日本山とぶつかった。だけどこれはそんなことをやったやつがバカなのです。日蓮宗そのものがそうしたわけではない。

ガンジーは「南無妙法蓮華經」の祈りを、これも不思議なことですけども「仏教の祈り」といつている。今でもいつています。ガンジーのお墓で一月三十日とか十月二日とかに祈りがありますけれども、そのときにプログラムを見てごらん下さい。「仏教の祈り」と書いてあります。「仏教の祈り」というなら、「ブツダン サラナン ガッチャーミ」とか、「ダンマン サラナン ガッチャーミ」、それから「サンガン サラナン ガッチャーミ」というパーリ語の三帰依文があるのですが、それを「仏教の祈り」というでしょう。これならば、インド人ならば回教徒だって、キリスト教徒だって、「仏教の祈り」だということがわかります。言葉でいうのは仏教徒だけしかいわないですけども、それが「仏教の祈り」であることはだれでもわかります。欧米の人が聞いてもわかります。それをなぜ日本の、一お宗旨のお祈りである「南無妙法蓮華經」をとりあげたのでしょうか。

これは日蓮宗のお坊さんが、モラルジ・デサイというインドの首相になられた人ですけども、この方の晩年に、その人にお目にかかって聞いておられるのです。それは羽田の石井上人やなんかです。このデサイさんに、「ガンジーは、なぜ南無妙法蓮華經をいったのですか」という質問をしている。デサイは「ハーモニーだ」といったのです。このとき案内したのは日本山のお弟子さんですから、私はあとでこの人を叱りました。デサイが「ハーモニーだ」と答えて、それで納得するとはばかみたくないものだ。それで納得できるかと。「仏教の祈り」といつて、アシユラムの中でガンジーが、祈りの冒頭に「南無妙法蓮華經」をいう。これがなぜハーモニーなのだ。ハーモニーというならパーリ語の「ブツダン サラナン ガッチャーミ」をいうのです。それをなぜ日本の「南無妙法蓮華經」をガンジーは採用したのだ。ここところは納得できないではないか。というよりも、ガンジー主義者で有名なデサイという、この総理大臣にもなっている人ですけども、このデサイのような人物でもわかっていない。

わかっていないのはどういうことかといえば、ガンジーは、「南無妙法蓮華経」をなぜ自分が採用したか。なぜ「南無妙法蓮華経の祈り」を使っているか、一言も説明していないのです。ガンジーの記録は大変しつかり記録されていて、図書館にいったい記録が残っている。ガンジーという人は、「今日の断食は何のためにしたのだ」とか、そんなつまらないことを一々そばの隨身や、まわりの人に説明される人です。ところが「南無妙法蓮華経はなぜするのだ」ということは一言もいっていない。記録がない。もちろん書いたものもない。それにしてもあしかけ十六年間、毎日朝晩「南無妙法蓮華経」をいつていた。なぜその記録をしないのでしょうか。このことでも不思議なのです。やはりガンジーという人は、「南無妙法蓮華経の祈り」のただものでないことをさとったのですね。ですから、これはうっかり説明できない、記録もできない。ただご自分でその「南無妙法蓮華経」を生涯、保ち続けられた。この歴史は宗門の方々、無視できないでしょう。

日本国はその当時一等国といわれていた。敗戦なんかは初めてですから。だからガンジーは日本国にあこがれていたのかなというような気もしたのです。ところが日本が負けまして、完全にアメリカから占領されて屈辱を受けているような状態のときでも、ガンジーのお題目は消えていないのです。ガンジーは独立後もまだ生きていましたから。インドが独立した後、ビハール州の農村を回っていました。そこでのお祈りを聞いても「南無妙法蓮華経」をいつているのです。そうすると日本が一等国だ、何だとかそんなことは関係ない。では仏教を知らなかったのだろうかということになるのです。ところがガンジーの道場には、アシユラムには、ダルマナンダ・コウサンビという世界的に有名な仏教学者、お坊さんがいたのです。これはお師匠様がガンジーを訪ねて行ったときよりも十七年も前からガンジーと接触していました。このコウサンビについて書いた本を読んだことがありますけれども、コウサンビという人が初めてガンジーを訪ねたのはプーナというところですけれども、そこでコウサンビは「私は仏教を勉強しておりますけれども、私よりもあなたの行動がはるかに仏教の理念にあっているものです。あなたこそ本當の仏教徒だ」という賛

嘆をしているのです。

もう一つコウサンビを通して感じることは、この方は一九四五年に亡くなられた。亡くなる何カ月ぐらいか前に、その時期にバジャージという財閥がおります。その中の私が非常に親しいのがラームクリシナ・バジャージですけれども、この人の兄さんでカマラヤン・バジャージという人がコウサンビに千ルピーご供養しているのです。一九四五年当時の千ルピーといったら大変なお金です。私が行った一九五三年ごろでも一ルピーが七五円六〇銭です。ですから大変な価値です。その金でお弟子さんを三人セイロン（スリランカ）に勉強に行かせようとしたのです。そういうことをしようとすると、ガンジーから手紙がきていました。その手紙がまだあるのですが、その手紙に「そんなつまらないことをやめろ、セイロンの仏教などを勉強に行くのは」と書いてあるのです。それはガンジーから見ると、セイロンの仏教をまるつきり問題にしている。ダルマナンダ・コウサンビという仏教学者と長いつきあいがあったガンジーが、仏教を知らないはずがない。仏教を十分研究した人でしょう。そのガンジーが、なんでコウサンビのお弟子さんがセイロンに行くことを「つまらないことだ」といったか。

これも私がガンジーの仏教観を知る一面だと思いましたが、確かに南方仏教のテラワダの上座部仏教は、独立運動の指導的な立場に立っていないのです。インドだけではない、ビルマでもセイロンでも、何らそれに対して衆生を導く力になっていない。ガンジーの目から見ると、そんな宗教はいらないのでしょうか。二〇〇年余をこえる長い搾取の中から、その鎖を断ち切らなければならぬこの時期に至って、仏教がその指導的な立場に立っていないならば、そんな仏教はガンジーにとって何の価値もないのです。むしろその程度の理念なら、ガンジー一門が毎日あげている『バグワット・ギータ』の「ギータ」という「インド教の祈り」があります。このインド教のギータの理念で十分だと思っていたのではないかと思うのです。それほど事実、ガンジーという人は、このギータの理念を高く評価している人です。『バグワット・ギータ』の理念の方が、はるかに仏教よりまさっている。だから、こんなものどうでもよいのだ

というのが、おそらくガンジーの仏教観だったと思います。そういうガンジーのところに、お師匠様によってお題目がいったのです。

私がワルダに仏舍利塔を建てましたけれども、建てた場所は、お師匠様がガンジーと会見した場所とちよつとすぐそばです。そこに建物が見えるくらいです。だからお師匠様がこの場所を決められたときに、二カ所候補地があったのですけれども、最初に今の仏舍利塔が立ったところに行かれまして、「ああ、ここだよ」といわれた。「なんでここがよいのですか。もう一つありますよ。セウグラム・アシユラムのそばにもう一つ土地があるのですが」といったら、「いや、ここにしよう。ここは毎日、私がお修行にきて、ご祈念していて、夕日を拝んでいたときに見た景色なのだ。だから見おほえがある。だからここにしよう」こうおっしゃったのです。

するとそこで、恩師藤井上人が太鼓をたたいて回っていけば、いやというほどガンジーの耳にお太鼓の音が入りまゝす。お題目の声も一日じゅう聞こえます。お師匠様のご祈念は生半可なご祈念の仕方ではないですから。それをやっておられた。これがガンジーには非常に不思議に思ったでしょうね。しかも「何を祈っているのだ」とおそらく聞かれたに違いない。これも記録にありません。ガンジーの記録にもないしお師匠様もいっていないから、私の推察でしかない。けれども当然ガンジーは聞きますよ。「そんなに一日じゅう何を祈っているのだ」と。すると「インドが独立することを祈りしているのだ」と答えるでしょうね。これでびっくりしたのです。これが「立正安国の祈り」ですけれども、こういう祈りは世界中ないのです。これをガンジーは直観的にすぐわかった。

ガンジーが毎日唱えているお祈りにしても、世界の宗教界で使う祈りの中でも、「独立を祈る」という言葉はあり得ない。これは「立正安国の祈り」以外にありません。ですから立正安国の講義をしたわけでもなければ、お師匠様は『法華経』の説明をしたわけでもありません。第一お師匠様は、英語も使わない、インド語もしゃべらない。通訳についてきた沖津というお弟子さんは、この人は一級建築士の免許をもっている人だから、英語ぐらい少しはわかっ

ていたかもしれませんが、片言の英語です。そのくらいの方が通訳です。それだからガンジーに『法華経』の講義などするはずがない。事実していないとお師匠様がおっしゃっているけれども、できはしないのです。だから、ただお題目を聞かせていただけです。ガンジーの周りをお題目を唱えて太鼓をたたいていただけです。何を祈ったかといえばそれは独立を祈った。もしガンジーでなかったら、それを自分の祈りにはしません。しかしガンジーという人はただ者ではなかった。この祈りの意味、どこを対象にして祈っているかがわかった瞬間に、自分の祈りにされた。これは世界中に独立を祈れる祈りなどありません。国を祈れる祈りなどないのです。

ついでに、さつき中野先生から指摘されたのですけれども、日本山では『立正安国論』を拝むのに、「まず国家を祈りて仏法をたつべし」というあの箇所を、「まず国家を祈らんには」とお師匠様は私どもにいわしているのです。これは中野先生の論文に書いてあったのです。「まず国家を祈りて仏法をたつべし」というこの言葉をみんな誤解してしまつて、国を本尊にして国を拝むのだ、国を中心にするのだ、というふうには日蓮門下の連中の中には、そういうバカな考え方を起こすやつがいたから、こういう誤解をしてしまった。お祖師様はそんなことはやっていないというような意味のことをお書きになつた。その通りなのです。

お師匠様はそれを私たちに紹介したときに、こういう過ちを侵すから、だから私は「国家を祈らんには」と読んでいるのだとこうおっしゃつたのです。お師匠様みたいに漢籍に詳しく漢文をよく知っていらつしやる人が、「国家を祈らんには」と読むか読まないかぐらひはご存じです。百も承知しておられるけれども、「祈りて」といつてしまつと、みんなそういう誤解をしてしまつていたから、だから「祈らんには」と私たちに読ませているのです。

これはついでに申し上げますけれども、「祈る」ということは、私どももこうやつて拝むことには違ひないけれども、「願う」ことです。「祈る」という意味は「願う」ことです。国家の何を祈るかというのは、これは典型的な日本語です。国家の何を祈るか、何を願うかということです。だから、いうまでもなく「国家の安穩、国家の平和を願わ

んには」という意味ですから、「願いて、願って」という意味です。だから別にこれはそんなに気にする内容ではないと思うのですけれども、どうもこれは宗門の学者でもそれを気にしている人がいます。久保田先生などでも、この場所はお客さんのいつている言葉だから、あまり気にしないで用いない方がよいなどとおっしゃっている。そんなことをいうとよけいわからなくなってしまうのです。これは国家の安穩を、国家の平和を祈るといふ、願うということだけのことで、別に単純なものだと思います。そんななここで引つかかるような問題ではないと思っています。

インドには非常に問題になるものがあります。それはコミナリズムというものです。宗教の回教徒とインド教徒との対立があります。それは非常にインドはやかましい。このことでボースでもネールでもガンジーでも、みんな独立前から苦労しているのです。独立した後、インドのコミナリズムをどう打破をするか。これは指導者がみんな全部苦労しています。ボースがインド国民軍をつくって率いるときでも、このことをこの国民軍の編制にあたって非常に心配した。ワルダに仏舍利塔を建てましたけれども、このワルダの仏舍利塔は見事にこれを打破しています。みんなガンジーの悪口をいつていた新仏教徒もお参りに行きますし、ガンジアーンもお参りにくる。毎年何回かお祭りをしますと、みんなどっちもお参りにきて参列してくれる。こういうことは他になかった。それで私がワルダに帰りまして、カトリックの人も回教徒の人もみんな遊びにきてくれて、一緒にお茶を飲んでくれます。ワルダというのはガンジーの育てた町ですから、そういうところが非常に徹底しています。こういう一つの大きなことにもやはり「立正安国の法門」は力があると思うのです。

私らちよつと反省しなければいけないのは、日本山の人は、お師匠様の徳が高いから、藤井上人の徳が高いから、ガンジーにお題目を伝えたのだとそう解釈してしまうのです。ガンジーはもちろん聖者だから偉いです。だから聖者と聖者とがまみえることによって、お題目が伝わったのだという解釈を日本山の人はしているのです。これは間違いです。もしも聖者と聖者であっても、「南無阿弥陀仏」をもつていったらどうなりますか。これは伝わりはしないの

です。「南無妙法蓮華經」だから伝わった。「南無妙法蓮華經」が「立正安国の祈り」だから伝わったのです。ですからこれは「立正安国」という祈りの性質のあるお題目が行ったのです。一人歩きをしたのです。その走り使いにお師匠様になっただけなのです。こう解釈するのがお師匠様のお心に沿った解釈なのです。聖者と聖者があいまみえることによつて、お師匠様の徳によつてお題目を伝えたなどと解釈したら、私がそうお師匠様の前でいったら、「ばかなことというな」といつておそらくしかられます。これはたとえ聖者と聖者であろうと、お題目だったからガンジーに伝わったのです。お題目にはそれだけの力がある。さつきも申し上げましたように、「立正安国」という祈願のための祈りです。このための祈り、これは世界のどの宗教の中にもこの「南無妙法蓮華經」以外にはありません。これをガンジーはよく見抜いて下さった。これは我々日蓮門下の者よりも、はるかにガンジーの方が高いのです。これははっきりいえます。「然るに日蓮は、何れの宗の元祖にもあらず、また末葉にもあらず」というお祖師様のこのお題目は、ガンジーが示してくれたのです。

私も子供のときからお題目を聞いて育っています。私の両親はお師匠様の弟子になった人ですけれども、その前はやっぱりお題目を一所懸命に唱えていた信者なのです。堀の内のお祖師様の二十三夜講に入つて一生懸命やっていたのです。だから私子供のときから、もの心ついてから、母のお乳をしゃぶるときからお題目を聞いている。だからお題目を聞くと、どうしてもやっぱり日蓮宗というようなイメージになってしまう。「南無妙法蓮華經」といえば日蓮宗。今でも私はそうなります。

ところがガンジーの「南無妙法蓮華經」には、日蓮宗も日本山もありません。まるつきり「平和の祈り」として「南無妙法蓮華經」を唱えている、採用している。これこそお祖師様の我々に残してくれたお題目ではないのですか。ですから、日蓮大聖人のお題目は、ガンジーによつて受け継がれたのです。ガンジーが唱えたお題目、あれこそお祖師様のこの世に残されたお題目だと、こう解釈しております。

いろいろの話がありますが、時間もありませんから、この「平和行進」について最後に触れておきます。平和行進も、お題目を唱えて下種結縁、太鼓をたたいて町を歩いてお題目の声を聞かせるということですけれども、本来これはある地点からある地点まで太鼓をたたいていけばよいというものではない。街頭修行するのが日本山の本来の修行です。ここに平和行進している武田さんという人がおります。この人も佐渡を開教するときには、佐渡の両津の町を毎日ご修行して歩いていました。時計のように横町からずつと太鼓をたたいて、あっちの横町で聞かれた後、今度はこちらの横町から太鼓をうつ、そういうご修行をしていた。これが日本山の街頭修行です。これが日本山の本来の修行です。

その街頭修行を平和行進というようにもっていったから、私どもは平和行進によって平和に貢献できると信じているのです。これを間違えて、平和行進のときだけ参加すればよいのだなどと、こんなことを考えている者がでてきたら危ないのです。放浪の延長みたくになってしまふ。こういうことに陥りやすいところに今日本山はかかってきていますけれども、出家は放浪の延長ではない。日本山といえども、このところをわかまえておかないと、これからの日本山はおそろしいかげんな日本山になってしまふ。そんなに皆さん期待されるほどの日本山などありません。今の日本山はこの点がはつきりしていないから危ないのです。放浪ではありません。

お師匠様がインドに行かれたのもたった一人でいかれました。しかしこれも放浪ではない。みんな見落としていることは、それ以前にインドのことをよく調べています。言葉はわかりません。英語も知らない、インド語も知らない、でもインドのことをよく調べられている。だから向こうでまごつきません。しっかりこちらで準備された人に会っています。それからガンジーに会うのが目的ですけども、昭和五年に日本を立たれて昭和八年までガンジーに会っていない。その間、カルカッタにおられたときもあるのですが、タゴールに会おうとしないのです。カルカッタから三時間、汽車に乗ると、そこにタゴールがいるのです。あのタゴールに会おうとなさらない。日本の商社の人やなんか

で、お師匠様が偉い人だと思う人がいて、そういう人が、ガンジーは今、円卓会議やなんかで忙しいからなかなか会えません。だからタゴールにちょっと会ったらどうですかという。タゴールに会うことは何も危険がないのです。英国から生まれている人でも何でもない。だからタゴールに会えばよいのですけれども、お師匠様はタゴールという人が偉大なことをよく知っているくせに会おうとなさらない。西天開教の対象とする人が、これはガンジー、だからタゴールに会ってはいけないのです。それで会わないで済みました。

それから、みんな今日西天開教を誤解していることは、お寺を建てたということ、仏舍利塔を建てたということです。これもお師匠様は、西天開教の数に入れておりません。はっきり言っておられる。仏舍利塔は建造物だから平和をつくるわけではないのです。これは私もインドのカカサーブという人から質問されて困ったことがあります。カカサーブはガンジーの直弟子の人で、博士で、なかなかの文学者ですけれども、この方が日本にきたとき、「今井さんね、仏舍利塔、仏舍利塔と藤井グルジイはいうけれども、仏舍利塔などはインドにはくさるほどあったのだよ。パールフットの仏舍利塔だ、サンチーだ、アマルバティーだ。これはあなた今はどうなっている、みんな廢墟になっているではないか。それからスリランカ（セイロン）、ビルマ、タイ、もう村々にみんな仏舍利塔があるではないか。ビルマだってセイロンだって、みんなインドと同じ植民地で属国だったではないか。ポルトガルに支配されたり英国に支配されたり、オランダにいじめられたり、ずっとそういう歴史をもってきている。その間、仏舍利塔は何を救ってくれたか。だから仏舍利塔を建てれば平和がくるぞなんて、そんなことを信じられるか」とカカサーブがいわれた。カカサーブ・カレルカールという人です。

そのとき私は困っちゃったなと思ったのですけれども、思わず答えたのは、「鎮護国家の法門です。日本でもそれは仏教が六世紀に入ってきて、一番最初に仏舍利塔が四天王寺に建ったのは六世紀です。けれども日本の仏舍利塔は、鎮護国家の祈願をこめた塔ですよ。しかしパールフットやアマルバティーにしても、みんなそういうところの塔は、

生天を願って、個人の救いを願って、それでみんな仏舎利塔を建てたのだ。今お師匠様が祈願している仏舎利塔は、そんな仏舎利塔ではありません。この日本の仏教文化の源に帰そうとしている。日本人はまず仏教をどういう面から採用したか。仏教は自然に流れてきたとは思っていない。日本人は日本民族の仏教を選んで、ピックアップしてとったのだ。その中で鎮護国家の法というものが、これを選んだのが日本民族の仏教です。それを今藤井グルジイは我々を通して運動しろと言っている。ただ仏舎利塔を建てろと言っているではありませんよ」。こう言ったら「わかった。それで初めてわかった」といって、このカカサーブが非常に感動してくれたのを思い出しました。

こういうものを日本山の人からわかないと、ただ仏舎利塔をやたらに建てればよいと思ってしまう。そういうものではない。お師匠様はインドで、ガンジス河の石を拾ってきたのではないのです。お釈迦さまの真身舍利を感得してきたのです。釈迦牟尼世尊真身舍利をそうやたらに感得できるものではありません。お師匠様が感得した仏舎利の数は二百粒近い感得です。

私はネールさんが自ら下さった仏舎利を奉侍して、日本に船で私自身がお隨身して帰ってきましたから、そのときその仏舎利を拝みまして、それで私自身もお隨身している仏舎利と比べてみると全く同じです。この仏舎利というものはどういうものかというのは私実際拝んでおります。その仏舎利をお師匠様は二百粒近いものを感得しています。一番最初に感得したのは昭和八年の八月にスリランカのギニガテーナというところで、行脚をされていて初めて泊まったお寺で下さった八粒、これが最初の感得です。それからまたこのギニガテーナのご住職が、また後から王舎城におられるお師匠様のところに送っていますけれども、それだけではないのです。お師匠様の記録にはありませんけれども、カシミールにおいても、ビルマにおいても、それから王舎城の中でもみんな集まってきた。

なぜこういうふうに集まったかといえば、その当時仏舎利塔は全部壊されていました。ラジギールでも荒れ放題なのです。今でこそラジギールでもクシナガラでも全部整備されていますけれども、その当時の仏跡は完全に廃墟になって

いました。どこが何だかわからない。道もあるかわからない。私が行ったときでも、ご祈念に靈鷲山に上がって行く途中には、虎の足跡がいっぱいあった。あそこが舗装されていないのです。私は下のお寺から毎日日参する。そうすると舗装されていないから、虎の足跡が明るくなったときに見える。行くときには真つ暗の中を歩いていく。帰ってきたときに虎の足跡を見て、新しい足跡ですからギョツとしたことがあります。そういうところだったので。そのときにみんなお仏舍利を奉持している人はインドの中にたくさんいた。その人たちがお師匠様の徳の高いことに感激して、みんなお仏舍利を奉持してお師匠様に差し上げたのです。これをお師匠様は記録していないし、言い伝えていない。それからお弟子さんもいたいて、丸山上人もお仏舍利を何粒もいただいている。これをやっぱりお師匠様に差し上げています。これも言っていない。けれども二百粒近い仏舍利がお師匠様のところに集まったのです。

私もインドに長いのですけれども、そう簡単にお仏舍利は集まりません。それほど向こうの人たちは大事にしていたのです。回教徒の侵入のときに髪の毛の中に隠したりしてみんな逃げたのです。そういう仏舍利をみんな保存していた。それから廢墟になった仏舍利塔の中のものをみんな持ち出していった。それもお師匠様のところにもってきた。お師匠様自ら拾いだしたのではないけれども、そうして集めた人がみんなお師匠様のところにもってきた。それでお師匠様は仏跡復興を誓願したのです。ただ仏跡が荒れているからというのではない。そこで仏舍利塔を建てなければいけない。また戻さなければいけないというので仏舍利塔を復興したのです。建てたのです。ここのところも申し上げておかなければいけないのです。

四

西天開教という大聖人様のご誓願、それから大聖人様が自らなさっているという認識のもとに、お師匠様が立ち上がってご修行されているわずかな中に、かかる大量の仏舍利が集まってきたということは、今申し上げましたように

不思議なのです。不思議というよりも、これは大聖人自らがこの仏舍利をいただいたのと同じなのです。お師匠様が仏舍利を感得したのではない。お祖師様が西天開教でこの仏舍利を感得されたのです。ご妙判に書いてないからとか何とかみんなおっしゃいますけれども、確かに書いていない。書いていないけれども、西天開教という文字もありません。そんな文字はありません。西天開教という言葉は、お師匠様が言われている言葉です。「日本の仏法、月氏へかへる」という、これを西天開教というご修行によって実現しようとした。その跡を踏もうとした。「日本の仏法、月氏へかへる」という予言は、そのまま日本の仏法を月氏へ返すお祖師様の誓願です。それが七百年たって、お師匠様によって、藤井上人によって実現して、実行してみたらお仏舍利が集まってきたのでしょうか。だから身延山にお仏舍利をおまつりしているのです。このことを日蓮宗はわかってくれなない。「舍利を安んずるを須ひず」とお経にでている。これは確かに舍利否定の方から編集した言葉だと私は思います。けれどもとりよつては、これはむしろ積極的に、「舍利をまつらなくても塔を建てろ」ということになるのです。

仏舍利は八万四千に分けられているという伝説がある。八万四千の塔を建てたにしても、八万四千一塔目はだれが建てたのですか、どうするのですか。仏教徒の信徒の数は、もう法華経成立の当時には八万や十万ではありません。ですから華嚴系の經典の中にも、むしろ仏舍利信仰を否定している言葉も確かにあります。「舍利を安んずるを須ひず」なんていうのはまだ否定のうちに入っていない。「舍利をおまつりしなくても塔を建てろよ」と、こういう意味にもとれるのです。むしろそうとつた方が自然です。「経巻を須いず、堂塔も須いず」。寺もいらぬ、経巻もいらぬといつてもやつぱり信仰は残るのです。

そういうことで、こんなことに仏舍利塔反対というのはおかしい。この機会にはつきり私は申し上げておかなければいけない。仏舍利塔否定などは法華経信仰の中ありません。ご妙判になくても、「舍利をとどめて正像末の衆生を利益したもう」と、『観心本尊抄』にあるとおり、事実利益しているのです。ならば今我々が仏舍利塔を建立する

ことが、立正安国の祈願の象徴だとするなら、なんでこれを否定する理由がありますか。反対する理由がありますか。宗門の方自らが建てて下さったら、私の奉侍している仏舍利だって差し上げます。こういう仏教徒の数が、大乘仏教が成立した当時は、インド中にいたのです。仏舍利を奉侍している信徒はわずかです。一握りです。おそらく仏舍利を奉安している人たちの中には驕慢心がおきたでしょう。「おれは仏舍利があるぞ、おまえにはないだろう」と、そこで当然こういう經典ができるのです。だから華嚴系の經典が生まれた当時の背景を考えて下さったら、だれでも常識的に判断できることです。こんなことをことさらに何か鬼の首でもとったように、仏舍利塔建立の反対の理由にしたり、仏舍利信仰反対の理由にする根拠にはなりません。そんなことをいうなら、經典もいらないれば仏さまの仏像もいらない。本尊は我々の感覚では、目に見えないものを本尊だと思っています。それを何とかあらわそうと努力して墨にしてお祖師様は、本尊も書かれました。それをまた彫刻にもできましよう。絵にも描きましよう。しかし本来、本尊は目に見えるものではありません。本尊には目に見えなくても、はたらきがあるのです。その躍動している本尊のはたらきが、仏舍利塔を建立しているのだという信念のもとに、お師匠様は動かしていました。だから晩年、宗門の方々の集まりで、仏舍利塔が本尊だという言葉がでたのです。だからみんな「とんちんかんなことをおっしゃるな」と思つてまごついたと思います。けれども、そのときお師匠様の年齢を考えて下さい。もう九十八歳、九十九歳というときのお話です。このときちよこつと言われたからといって、そのことをあまり追求されるとおかしい。本尊が建立したものの、本尊の活動によつて生まれたものと思えば、仏舍利塔は本尊なのです。それとも稲荷町の店先に並んでいるあれが本尊だともいうのですか。本尊は本来目に見えないもの、これが日本山妙法寺の法門認識です。

このお師匠様は立正大学で最後に講演なさつた。これはご遷化されるわずか二カ月前です。そのときに、私、隣りの部屋で遠慮して聞いていたのです。日本山の者だけ入つて、お師匠様の前を占領したら悪いと思つたからです。そのときに、「大崎を出て先がけしたけれども、後に続く者がいない」という言葉をおっしゃつたのです。私このとき

本当に泣けました。これはお師匠様のようなお方でも、もう百になられたお方が、思わずもらしたぐちなのです。お師匠様は宗門に期待されている。「大崎を出て先がけしたけれども、後に続く者がいない」。宗門の中から新しい時代がこれからどんどん変わってくるでしょうけれども、この藤井上人のなさった西天開教というものをもう一度考え直してもらいたいです。

日本山妙法寺の山主などと思わないで下さい。日蓮宗の皆様の大先輩だと思って考えて下さい。私のお師匠様には違いありませんけれども、宗門の大先輩でもあるのです。その方が自らお祖師様の未来記を果たされて、お祖師様自らがすることをやられた。だったら、これにけちをつけてもしょうがない。これを追求してもらいたい。「ガンジーが、なぜお題目を唱えたか」ということさえも、何も耳を傾けようとしなさい。立正大学でだって、身延山大学でだって、出たものはそのことを聞いたことがない。教師が言わないのだから生徒がわかるわけではないでしょう。だけどこれほど重要な歴史がありましょいか。インドを独立させたマハトマ・ガンジーが、十六年間にわたって毎日「南無妙法蓮華經」を唱えていたという事実、これを無視して日蓮宗の教育はありません。ですからこれを無視することは、宗派根性ではないといっているのです。現代宗教の感覚の誤りです。オウムをつくった宗教観がこの誤りを作っているのです。私はこういうことを申し上げるのが非常に失礼だと思えますけれども、このような機会を与えていただいたことで、あえて申し上げる次第でございます。

どうもありがとうございます。失礼いたしました。(拍手)

対談

司会 聞き手役に大阪本養寺住職、現代宗教研究所嘱託の難波宏正上人をお願いし、これより対談インタビューに移りたいと思います。では、よろしくお願いいたします。

難波 ただいまご紹介いただきました現宗研の嘱託を務めております難波宏正と申します。

今井上人には長時間にわたるご講演をいただき、まことにありがとうございます。およそ一世紀にも及ぶ藤井日達下の宗教活動についてお話を願うということは、当然一時間や二時間の時間では不十分だということは重々に承知いたしております。今井上人様のお話の中でも日達下下の宗教活動あるいは理念については、さまざまな角度からこれを説明することができらうけれども、特に今日、今井上人には、藤井下下の最も大切な誓願行であります西天開教、日本の仏法を月氏に返す、インドに返すのだという『諫暁八幡抄』の日蓮大聖人様の未来記を自らが実現する。今日のお話では、これは単なる藤井下下の誓願にあらずして、お祖師様ご自身の誓願であったと拝すべきであるというご説明を賜りました。したがって西天開教、なかんずくマハトマ・ガンジー翁が、「南無妙法蓮華経」のお題目をお唱えになられたことが、西天開教の証であるという視野からのご説明を賜ったわけでございます。

そういう問題も含めまして、日蓮宗門の先輩方の中にも、長老と呼ばれるような年配の方々は藤井日達下のお若いころから、あるいはまたお元気な壮年のころからの活動についてよくご存じですけれども、戦後に育ちました私どもにとりましては、なかなか藤井日達下と接する機会が少なかつたように思います。ですから日本山妙法寺という宗教教団を含め、藤井日達下のことをあまり存じあげていない方が、これからはだんだんと人数がふえてきているのが今の現状ではないかと思えます。

そこです、今井上人様にお尋ねしてまいりたいことですが、私どもは日蓮宗という宗派名を名乗っておりますけれども、日本山妙法寺という名前が、宗教法人としての側面をもつのも当然であります、それ以前にもっと大切な法門の証としての名称として「日本山妙法寺」を名乗られたというお話を、かつて私も藤井猊下から直接承ったことがございます。まず「日本山妙法寺」というこの教団、団体の名称について、どういった由来があつて藤井猊下はこの名を名乗られたのであろうかと、素朴に疑問に感じたわけです。できますれば今井上人の口から、その説明を簡単にいただければありがたいと存じます。よろしくお願いいたします。

今井 恩師上人様が宗門の方として最初にお寺を建てられたのが滋賀県の堅田でございます。そのときはまだ聞法教会所といつて、日本山妙法寺の名称を使つておりません。最初に日本山妙法寺を使つたのが満州です。満州にお寺を最初に作られたときに「日本山妙法寺」とした。これは日本の仏法を旗印にしているという意味で、いわゆる山号・寺号ではないのです。ですから、どこに建てても日本山妙法寺です。だから日本山妙法寺というのは、単なる山号・寺号としてではなく、旗印として日本山妙法寺をうたつておられるのです。そういう意味です。

難波 かつて宗門の先師の中にも、尊門流ですか、日尊上人が、どこへ建てても上行院という名前をお使いになつたという宗門の歴史がございます。

今井 本願寺がそうですね。

難波 そうです。弥陀の本願ということで、その象徴としての名を名乗られたのだらうと思います。日本山妙法寺が、私どもが各寺院で使います山号・寺号というような解釈ではないというご説明を、今、今井上人の言葉から賜りました。

これは今井上人様、藤井上人の教化の対境が我が日本国国内にとどまるのでなくして、西天・インドを足がかりとして、一閻浮提に及ぶという大きな理想信念の証から海外伝道にたつときに、やはり日本の仏法が一閻浮提に広まら

ねばならないという思いから、日本山という山号を名づけられたのだろうかというふうにも拝察できるのですけれども、その点はいかがでございましょう。

今井 これは第一に、お祖師様の思想からいって西天開教が第一におかれなければいけないことです。けれども、お祖師様ご自身が漢土、月氏ないし一闍浮提ですから、西天開教によって、お祖師様の未来記が証明されたという段階にきて初めて一闍浮提に広がるという自信をもたれたのです。それで海外は全部アメリカもヨーロッパもということになりますけれども、まず西天開教が実現するかしないか、この点が最初です。それで実現したから、「西天開教猶一班」とお師匠様が書かれた漢詩の起句にそういう書きだしになっています。西天開教なんか小さなものだという意味ではありません。西天開教の使命を果たさなければ、その資格がないという意味で、「西天開教猶一班」という言葉がでたのです。漢詩に書いてあります。

難波 先ほどのマハトマ・ガンジーとの出会いの中でも、例えば真宗の中山先生が「南無阿弥陀仏」でなく「南無妙法蓮華経」をガンジー翁が唱えたことに対する驚きを表明されたというお話を承りましたが、やはり当然のことながら、藤井猥下が日本の仏法を月氏に返す。その中身はこのお題目の「妙法蓮華経」の法門でなければならぬという、そういう強い思いがこの山号・寺号の中にも含まれているように私どもは拝察しておりますけれども、そういう解釈でもよろしゅうございますか。

今井 結構です。日本の仏法ですから。

難波 その日本の仏法はあくまでも『法華経』、お題目でなければならぬということですね。

今井 私どもはそう思いますけれども。

難波 そういう信念でございましょうね。ありがとうございます。

それから藤井猥下が大方鼻の、白杵の法音寺でございましたか、日蓮宗門のお弟子として出家得度せられましたか

ら、当然日蓮宗門に籍をおくお坊様であったわけでありませうけれども、後に形の上では宗門から離脱をした形になりまして、後の人から見れば別派を立てたと解釈なさる場合も多々あるかと思えます。あるいは日蓮宗門の側からいたしましても、日本山といえは日蓮門下の中に属する日蓮宗とは別派の教団だという解釈をしてしまう可能性があるかと思うのです。そこらあたりの将来に対する誤解を解いていただくためにも、藤井日達猥下が宗門を離脱なさったいきさつと申しますか、そういう問題について、さしつかえがなければ簡単に説明賜ればありがたいと存じます。

今井 これはお師匠様が残されている言葉の中では、葉山の法難の中で、警察から非常に弾圧を受けてまして、お師匠様も葉山で警察におちこまれた。葉山の警察に入れられただけではない。出されたら今度は藤沢署にもついていかれたり、鎌倉にもついていかれたりして、あるときはたらい回しにされたのです。そういうときのご迷惑になるから宗門から離脱したのだとおっしゃっているようですけれども、真相はそんなものではありません。これはむしろ宗門の方の行政側で除名したのです。それに対してお師匠様の方は「なぜだ」ということもお聞きにならないし、何も追求しなかつたわけです。そんならそれでもよい。お師匠様はそういうものに初めからこだわっていないのです。だから除名すれば除名するで結構、除名しないなら除名しないでも結構、こういうのがお師匠様の基本姿勢です。

ですから、戦後、宇都宮日綱さんが中山妙宗というのを立てられたのです。あときもいきさつはどういうことか私らもあまり興味がなかつたのですけれども、その後で日綱さんがわざわざ熱海のお師匠様を訪ねてこられたのです。そのときに中山妙宗としての大僧正の賞状をもってこられたのです。私は当然そんなものはいらぬとおっしゃるかと思つた。そしたら、お師匠様はそれをありがたくいただいたのです。だからそういうことにこだわらない。ただいてあげたいと思つていないのでしょうか。それはどこにあるかわかりません。そのときちよつと御宝前にあつたのですけれども、あとどこにあるかわかりません。お師匠様も一言だつて、私は中山妙宗の大僧正だなどといったことはないのです。私らお弟子もあまりそんなことにこだわらなかつた。そういうふうにごこだわらなかつたというだ

けであつて、宗門からお師匠様の名前が消えたのは、あくまで宗門の行政の方の方針です。

難波 なるほど。よくわかりました。そういったしますと、世間の人々が大きな教団から飛び出して、異論を唱えて別派を立てるといったような新興宗教の親玉的存在ではなかったことが再確認できるかと思うのです。藤井猥下ご自身が日蓮大聖人の末弟であるという自覚の中からたれたたれた伝事であるから、何か日蓮宗の教義と違う異論を唱えて別派を立てたのではないことを再度私どもは確認しておくべきだということです。

今井 あくまで別派ではないです。けれども日蓮宗というもの自体が、やはり一つの法律に保護されている団体ですから、その行政とは別れたつて、これは当然のことです。こういう事態を別派というような表現はできないですね。やはり宗教法人日蓮宗と宗教法人日本山妙法寺は、当然今の時代ですからできます。ですがそれは別派ではない。教義において日蓮宗の教義を日本山は否定したおぼえが全くありません。

難波 わかりました。それと日本山妙法寺のご出家を私どもが拝見いたしますときに、まず目の中に飛び込んできると特徴と申しますか、宗門と非常に違う特徴が見えますのは、その黄色いお袈裟をおつけになって、団扇太鼓をたいて街頭修行をされる。あるいはいつも剃髪をまもつておいでになるとか、剃髪染衣ですね、あるいはまたご出家教団ですから、家庭をおもちになつていないとか、そういう目につるようなところでいろいろ差があるわけです。何やら聞きますと、戦前は四つ紐と申しますか、本衣あるいは居士衣、そういう衣帯のお姿をしておられたと聞いておりますけれども、戦後あるいは藤井猥下がインドからお帰りになつてから、こういう黄色いお袈裟に変わったと聞いておりますが、それも藤井猥下が別にこだわるところでも何でもありませんね。

今井 こだわってないです。私もまだかつて、お師匠様から日本山の規則としてこういう姿をしなければいけないということ聞いたことがない。ごく自然に変化したのです。というのは何で変化したかといえ、お師匠様が八年間もインドに行つていますと、日本から着ていった衣などはもうないのです。ガンジーに会つたときは長い袖の

衣を着ていた。ちゃんと中に白衣を着て上に衣を着ていたのです。その格好だった。こんな格好はしていません。けれども向こうで補充できないでしょう。だから自然に、私も経験ありますけれども、向こうで生活していれば当然、これはシウラというのですけれども、シウラに変わるのです。これは本当に自然にそうなってしまった。だからお師匠様がインドから帰ってきたときには、日本の衣ではなくてこういう白い今のこんな格好をして帰ってこられた。そのときにはお弟子さんたちは見たことがないのだからみなじめなかつたです。でもだんだんに、これは便利ですから、それでこういうふうになってきたのです。

それともう一つの理由があるのです。戦後、私もそうだったのですけれども戦地から帰ってきたりしまして、着るものがないのです。日本山では本来は地下たびをはいっていたのですが、地下たびがああころ手に入らないのです。たまたま手に入ってもすぐ切れてしまう。それで靴の方が丈夫なのです。それから私らもどた靴で、軍隊の靴をはいたりしていた。それでこんなじゅばんもできないから袖の長いシャツ、その上に衣を着ればちょうどよいのです。これで坊さんだということだけはわかるわけです。やっていた。こんな習慣が自然に日本山の習慣になったので、今の日本山はちよつと反省しなければならぬところもあるのです。服装に対してちよつと粗末すぎる。考えなすすぎるところがあります。昔の日本山は服装に対してもつとやかましかつたのです。このごろは何でもよいという習慣が通ってしまったものですから、Tシャツの上にもそのまま着てご修行に出ていますけれども、やっぱりこれは考えないといけない。坊さんですからある程度の服装を考えた方がよいのです。だからといって長い袖を着なければいけないとか、これも規則はないでしょう。日蓮宗という団体だから作つたのであつて、これは法門の上でつくられたのも何でもないでしょう。だからそういう疑問がでてくるのは私にもわからない。

難波 よくわかりました。ありがとうございます。

それと先ほどの話の中で、やはり日本山妙法寺の布教活動を拝見いたしましたして、我が日蓮宗といくつかが違う点があ

るなど感じましたのは、日本山の場合には海外におきましても、大事なときに大事なところにいつでもでかけていて、そして撃鼓宣令のお題目をお唱えすることができるといふ姿勢でございますけれども、我が日蓮宗の方からいたしますと、なかなか寺をもち檀家をかかえ、住職をつとめ、あるいは家庭をもち、そういう地域社会で生活しておりますと、いくら大事なときに大事なところがあるからといっても、すぐそう飛んでいくわけにはいかない。束縛があるのも現実かと思えますけれども、その点日本山は原始教団といたしまして、ほぼ出家主義を貫かれて、妻帯をしておいでになりませんけれども、これは何も日本山の中で取り決めがあつて妻帯をしてはならないとか、こういう決まりがあつたのでございましょうか。

今 井 はつきり申し上げますと、日本山の中にそういう規約は何もありません。これはお師匠様がなさつていたことをできるだけそれに従おうとしているだけです。本当は日本山もはつきりとした教規を作らなければいけないと思います。それをしないとだんだんわからなくなつてきます。けれども教規によつて、規則によつて妻帯しないのではありません。戦場に行くのに軍人が妻子を連れていかれないということと同じで、日本山の今までの活動は、お師匠様のシャープな時代の活動は、全く法戦に臨んでいるのと同じなのです。

昔の日本山の私らの大先輩の人たちは、街頭修行にでます。そのときにお互いにちり紙をもっているか、手拭いをもっているかといつて、みんな確認しあつて、でていつていたのです。なぜかといへば、どこで検束をくうかわからないのです。というのは、日本山の出家は、内務省の認可を受けた僧侶ではありませんから、もぐり坊主です。それで天皇、皇后が行幸の場合は、前日に一斉に浮浪者を検挙するという規則が警視庁にはあるのです。それでそれに日本山はひつかかるのです。ですから街頭に太鼓をたたいて歩いていると、明日は天皇陛下の行幸だというような日は、もうその規則に基づいて警視庁が一斉にそういう人間を検束してしまふ。これは実に乱暴な話ですけども、実際そういう時代を日本という国は経たのです。それでみんなご修行中に検束をくうかもしれない。何も宮城のご祈念で、

あそこで検束をくつたのではないのです。そのあたりを歩いているうちに検束をくつた例がいくらでもあるのです。私の母でさえも、一緒にご祈念していて四谷署に二日も泊められたことがあるのです。お師匠様も内務省の認可を得ないもぐり坊主ですからそれにあたるのです。それが日本山の今までのいき方だったのです。

それからさっきの太鼓をたたくというのも、これもちよつと変な質問だと思つて聞いていましたけれども、これも何も日本山が初めて太鼓をたたいているわけではない。私が生まれたところは青梅街道の鍋屋横丁のそばですけれども、私が子供のときから、その新宿からずっと万灯が十月十三日に行列してきますね。池上で前の晩にエキサイトした連中がみんな常円寺から堀之内の妙法寺にみんな万灯がいくわけです。私が生まれたところの町内も、みんな日蓮宗でないのにお題目を唱える人が多かったです。だからお会式が始まる月、十月に入ると、みんな町内で一齐に太鼓をたたく練習をしていたのです。昔の日蓮宗はそういうものだったのです。日本山なんかよりはるかに太鼓をたたいていた。町を歩いていけば、このあたりではあつちでもこつちでも日蓮宗の太鼓にぶつかつたのです。私が生まれた町内でも、あの当時、昭和四、五年ごろで三千元もする万灯を出している。ですから私の家の玄関先まで万灯が挨拶にきました。私も子供のときにみんなにお布施をあげたりしたのをおぼえています。それが日蓮宗だったのです。だから何も日本山が太鼓を今たたいているから珍しいなどといわれると、日蓮宗もずいぶん変わつてしまつたなと思つただけで、本当は日本山より前からあつたのです。「だんだんよくなる法華の太鼓」という言葉があるのです。

難波 まことにつまらない質問をしまして相すまんことをいたしました。

今井 私の方がまごついているのです。

難波 これは藤井上人が立正大学——昔の大崎ですか——をでられましてから、御年三十三歳まで八宗兼学の學問をされたというように聞いております。お祖師様が三十二歳で立教開宗をなさつた、開教にたたれた。せめて一年でも學問をしたということとで三十三歳まで八宗兼学をされたと聞いております。それでご自分の行く道を撃鼓唱題

の一行に要約したということですが、当時の日蓮宗門の方の見方もそうかもしれませんが、今の宗門の人たちから見ますと、藤井上人は『法華経』の講義をするわけでもなし、学問をひけらかすわけでもなし、ただただ、御千箇寺参りのように太鼓をたたいてお題目ばかり唱えて歩いていくから、そういう布教方法ではたしてよいのかというような疑問と申しますか、批判めいた疑問がでてきたりすることも現実かと思えます。

これは藤井上人が三十三歳に開教に立たれましたときに、ご自身で回想なさっておられますけれども、共に大崎で学んだ同級のお坊様が、京都の本圀寺の執事をしておられた方が、藤井上人の開教を見まして、「藤井君は長い間、学問をしてどんな立派な学僧になるかと期待していたが、結局御千箇寺参りのあとを踏むような、太鼓をたたいて歩く乞食坊主の姿になり下がってしまった。藤井君の生き方はもうすでに今から半世紀時代遅れの開教のあり方だ」というように批評を下したことがあると、藤井君のご説法の中で聞いたことがございます。その中で藤井上人が三十三歳まで積まれた学問を一張の団扇太鼓に集約して、ひたすら「南無妙法蓮華経」だけを唱えて歩かれた、この藤井上人の行動・信念を、私もはもつと深く理解していくべき時期にきているのではないかと、先ほどの話の中から感じとったようなわけです。

時間の制約がございますので、最後に一つお尋ねしたいことは、先ほど今井上人のお話の最後の部分でもちょっと触れられましたが、立正大学で藤井君下が講義をなさったときに、「大崎を出て先がけをしたが、後を継ぐ者がいない」というぐちをポロツとこぼされたというお話がございました。その中で藤井君下は、私が三十三歳までした学問を一張の団扇太鼓に集約して、「余事をまじえず、ただ南無妙法蓮華経ばかり唱えて一世紀に及んだけれども、私のまねをする者は大勢できたが、なぜ私がこのご修行に集約し徹してきたかということを理解して求めようとする人がいないし、その上で実践してくれる人がいない」ということを、大変寂しい表情でお話をなさっておられた晩年の姿を今思っておすわけです。

日本山の長老としての今井上人のお立場からご覧になりまして、今後の日本山のゆく末と申しますか、あるいは今後日本山妙法寺が、この日蓮宗門とのかかわりの中において、どういうふうに展開していくことが、藤井日達上人の最も望まれているお姿であるかを、ぜひ今井長老の口から、その思いを一言語っていただいて、しめくくっていただければありがたいと存じます。

今井 お師匠様は終戦後、何回か私自身も拝見いたしましたけれども、一部経をあげられていることが何回かありました。やっぱり四時間近くかかってあげておられました。ですから私らも花岡山の道場では、昔はあげていたのです。お題目をあげていましたけれども、お経の稽古といいますが、それもやらされたのです。私も花岡山の道場に行くときには、どこをやるかわからないものですから、しようがないから一部経をもつていったのです。そういうので決して日本山は読経を否定しているわけではないのです。ただ日本山の信仰理念としては、はっきりと読経は確かに重要なご修行ではあります。重要なご修行ではありますけれども、祈りとはみなさない。祈りは南無妙法蓮華經というお題目が祈りだという解釈をしているのです。ですからお題目に専一しているのです。お経を読むことを否定してはいません。お経を読むことを否定したら仏教は成り立ちません。そんなことではない。これはご修行としては否定していいのです。けれども祈りとしては「南無妙法蓮華經」です。

難波 日本山の今後のゆく末と申しますか、……

今井 今後のゆく末はわかりません。私も何ともいえません。でも今いったお題目を「立正安国の祈り」として認識して、その祈りが続けていけば、何とかそこから答えがでてくるだろうと思います。どうしようといつても、先ほど申し上げたようにつぶれるかもしれない。私は日本山は絶対に盤石とは思いません。宗教法人日本山妙法寺なんていつ崩れるかわかりません。何か不動産は残りますから、完全になくなることはありえない。けれども日本山なんて存在価値がなくなるだろう。そういうことはあると思います。

けれども宗門だって同じことです。価値があるかどうかは、これは問題です。ですから宗門の方だって、そのなかから藤井上人の信仰理念が正しい、あれを受け継がなければいかんと思われるなら、日蓮宗のまま藤井上人の跡を踏んでいただければよいのです。これは難波上人のおっしゃるように、お寺がある、家庭がある、難しい。難しいかもりれませんけれども、たとえ一年交代でも、そういう形の中だって藤井上人の生き方に従うことはできるはずですよ。

私は望月さんが身延で総務のときにいったのです。日蓮宗の大学で、藤井上人の跡を大学——高校でもよいけれども——をでるまでの間に、夏休みにでも一カ月でもよいから交代で一回やらしてみたらどうだということです。それを単位に入れたらどうですかといったのです。インドを回って西天開教の跡を踏んでみる。ガンジーの塾へ行つてガンジーという方をもう一回見直してみる。こういうことを一回やらしたらどうですか。それでそれ自体が一つの単位として考えたらどうですかと勧めたことがあります。実現しなかったですが、これをやってくれば、今の生活のままだって、それで一生を送るといのではない。ちよつと一カ月でも二カ月でもまねごとでもしてくればそれによいのです。何もさつきもいうように、この姿をしなければ日本山でないというのではないのです。皆さんの姿だって日本山です。宗教法人日本山妙法寺と、藤井日達とは関係ありません。これは皆さんの大先輩の一人だと思つて、藤井上人を見ていただきたいと思つます。そうしないと、私らこのお弟子が大事な藤井上人という大人物を抹殺してしまうことになる。これはまことに申しわけないことです。皆様こそ本当にお師匠様を立てていただきたい人です。お願いいたします。

難波 ありがとうございます。我が日蓮宗の中にもまた藤井上人を宗門の宝として認めていく人たちが、これからまたでてくるであろうかと期待しております。その意味におきまして、今日は今井上人より日本山の長老としてのお立場からいろいろお話を承ることができましたこと、まことにありがとうございました。最後に御題目を三唱して終わりたいと思つます。